

契丹文字談義  
—小字解読の起点—

吉池孝一

東アジアの解読が必要な“文字と言語”に関心を持つ学生と教員の対話。登場人物は次のとおり。

佐藤久美<sup>きとうくみ</sup>：学生。ツングース系民族の歴史に関心があり金朝史と清朝史を学んでいる。満洲語の講義にでている。

山村健一<sup>やまむらけんいち</sup>：学生。いろいろな言葉と文字に関心があり、言語学を学んでいる。モンゴル語の講義にでている。

安井教授<sup>やすい</sup>：漢文の教員。各種の古文字資料の収集をしている。学生とともに契丹文字・契丹語の勉強会を始めた。学生に教えられるところが多い。

### 契丹小字解読の手法

安井教授：清格爾泰・劉鳳翥等(1985)の『契丹小字研究』<sup>1</sup>(1977年に公表された契丹文字研究小組(1977)<sup>2</sup>が結実したものは、期を画する成果であり、解読を大きく前進させたと評価されています<sup>3</sup>。この研究は、契丹小字文の中にある漢語音を利用して契丹小字の音を求めるという手法によります。今回はこの手法が取られた経緯を確認します<sup>4</sup>。

佐藤久美：契丹小字文の中の、契丹小字で表記された漢語によって幾つかの小字の音価を定め、次いでその音価を手がかりとして次々と“芋づる式”に他の小字の音価を定めていくという手法のことですね。

山村健一：どのような画期的な研究であっても、それを準備する前段階の研究があるにち

---

<sup>1</sup> 清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼(1985)『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社。

<sup>2</sup> 中国社会科学院民族研究所・内蒙古大学蒙古語文研究室契丹文字研究小組(1977)「關於契丹小字研究」『内蒙古大学学报』1977年第4期契丹小字研究專号,全97頁。

<sup>3</sup> 西田龍雄(1982)『アジアの未解読文字』大修館書店に「契丹文字研究班は、新しい時期を画する研究を発表した」(166頁)とある。この時点では『契丹文字研究』(1985)はなく、この評価は契丹文字研究小組(1977)に対するもの。

<sup>4</sup> この対話は、吉池孝一(2012)「厲氏1958年の契丹小字研究—漢語音を利用した先駆的研究として—」(『KOTONOHA』120(2012年11月)、1-6頁)に基づき修正増補したものである。

がいありません。

佐藤久美：そのような研究として、日本の山路廣明(1943)<sup>5</sup>と中国の厲鼎{火奎}(1958)<sup>6</sup>を採りあげるということでしたね。目をとおしておきました。

安井教授：それではまずは山路廣明(1943)から確認しましょう。

### 山路廣明(1943) 一契丹小字解読の起点 (その1) 一

佐藤久美：山路廣明(1943)は契丹文の中にある漢語音に着目した研究ですね。時期としても比較的早いものです。

山村健一：山路氏は、宣懿皇后哀册文（石刻文）の中にある契丹文字<sup>𐰽𐰺</sup>に着目し、漢字音「文」に相当するとしました。<sup>𐰽</sup>の音を wê、<sup>𐰺</sup>の音を ên とし、両者が合わさって wên(wê-ên)となり、「文」の漢字音を表わすことを発見したわけです。また、仁懿皇后哀册文（石刻文）の中にある契丹文字<sup>𐰽𐰺</sup>について、漢字音「仁」に相当するとしました。<sup>𐰽</sup>の音を ji、<sup>𐰺</sup>の音を in とし、両者が合わさって jin(ji-in)となり、「仁」の漢字音を表わすとしました。

佐藤久美：ところで、<sup>𐰽𐰺</sup>を「文」にあて、<sup>𐰽𐰺</sup>を「仁」にあてる発想は、何に拠ったのでしょうか。

安井教授：文献は明示されませんが、時代を考えると、いずれも羅福成氏の研究に拠ったと思われる。<sup>𐰽𐰺</sup>=文は、金毓黻(1934; 1974)『遼陵石刻集録』<sup>8</sup>に採録されている羅福成著「道宗皇帝哀册文 陳思摹寫 羅福成釋文」にあります。<sup>𐰽𐰺</sup>=仁については、同書「興宗仁懿皇后哀册文 羅福成釋文」にあります。もっとも、羅福成の研究は契丹文と漢文の意味を対応させたもので、契丹文の一部にせよ漢語音を示すと述べているわけではありません。

道宗皇帝哀册文には、契丹文の石刻と、漢文の石刻の二種がそろっています。

契丹文と漢文は、互いを翻訳した文ではないのですが内容の概略は同様と想定

<sup>5</sup> 山路廣明(1943)「契丹大字考」『浮田和民博士記念 史學論文集』(早稲田大学史学会編纂) 東京：六甲書房、313-322 頁。

<sup>6</sup> 厲鼎{火奎}(1958)「《漢語拼音方案》幫助了我考釋契丹文字」『語文知識』第 72 期 1958 年 4 月号、41-42 頁。なおフォントの無い漢字は偏と旁を組み合わせて{ }で示す。

<sup>7</sup> 契丹小字文は、契丹語の単語や漢字の音節を表記するために、“原字”と称される文字の最小単位を、通常は左右前後に最大 7 字まで並べて方形のブロックを作る。この文字のブロックは、漢文と同様に、縦に並べられ行は右から左に移行する。ここでは便宜的に契丹小字のフォントを左から右に横一列に配し、ブロックとブロックの間はハイフン (-) で区切ることとする。なお契丹小字のフォントは内モンゴル大学の研究グループが制作したものによった。

<sup>8</sup> 鄭慶濤發行(1974)『遼金元語文僅存錄』(全九冊) 台北市：台聯國風出版社印行、中華民國六十三年。第一冊『遼陵石刻集録』羅振玉輯による。

されます。漢文の中の人名や地名や年月日などは、契丹文の解読の大きな手掛かりとなります。漢文の 1 行目には「道宗仁聖大孝文皇帝哀册」とあります。傍訳は、これを契丹文の 1 行目に当てはめたと考えられます。2 カ所の 𐰺𐰽 に文を対応させています。

#### 道宗皇帝哀册文 1 行目

𐰺𐰽𐰺𐰽𐰺𐰽-𐰺𐰽𐰺𐰽-𐰺𐰽𐰽𐰽-𐰺𐰽𐰽𐰽-𐰺𐰽𐰽𐰽-𐰺𐰽𐰽𐰽-𐰺𐰽-𐰺𐰽-𐰺𐰽𐰽𐰽-𐰺𐰽𐰽𐰽-𐰺𐰽𐰽𐰽-𐰺𐰽

仁 聖 大 孝 文 皇 帝 哀 册 文

興宗仁懿皇后哀册文には契丹文と、漢文の篆蓋があます。漢文篆蓋には「仁懿皇后哀册」とあり、これを契丹文の 1 行目に当てはめたと考えられます。𐰺𐰽 に仁を対応させています。

#### 興宗仁懿皇后哀册文 1 行目

𐰺𐰽-𐰺𐰽𐰽𐰽-𐰺𐰽-𐰺𐰽𐰽𐰽-𐰺𐰽𐰽𐰽-𐰺𐰽𐰽𐰽

仁 懿 皇 后 哀 辭

山村健一：羅福成氏は、契丹文と漢文の対応から、契丹文の意味を推測したままで、契丹文字の音を推定するという発想はなかったでしょうね。山路廣明(1943)は、羅福成の契丹文と漢文の対応を利用して、契丹文字を最小単位に分解し、その音を求めたというところに新しさがあります。

佐藤久美：山路廣明(1943)は「契丹語の中には斯様な構造を有して漢語・漢字音を表はすものが可成り多い。」(321 頁)と喝破していますね。

山村健一：契丹文のなかに漢語が多いと見做し、その漢語と契丹文字との対応により、契丹文字の音を求めるという方法は、契丹小字を解読する起点といっても良いのでしょう。この論文について、長田夏樹(1984)<sup>9</sup>は「契丹小字解読の出発点とすることのできる着想であると言えよう。」(21 頁)と高く評価しました。

佐藤久美：しかし、求めた音を利用して、“芋づる式”に他の未知の契丹小字の音を解明するということはしなかった。山路廣明(1943)は契丹小字文を解読する起点ではあるけれども、後の契丹文字研究小組(1977)の手法に“直接に”繋がる研究とは見

<sup>9</sup> 長田夏樹(1984)「契丹語解読方法論序説」『内陸アジア言語の研究 I』神戸市外国語大学, 1-49 頁。『長田夏樹論述集(下) 漢字文化圏と比較言語学—中国諸民族の言語・契丹女真碑文・民俗言語学試論・邪馬台国の言語—』京都市：ナカニシヤ出版, 634-687 頁に再録。

なし難いということですね。

安井教授：それでは次に厲鼎{火奎}(1958)を確認しましょう。

### 厲鼎{火奎}(1958) —契丹小字解読の起点(その2)—

安井教授：厲鼎{火奎}著「《漢語拼音方案》幫助了我考釋契丹文字」は『語文知識』第72期(1958年4月号)に掲載されたものです。契丹文字の専論ではなく、1953年に公布された「漢語拼音方案」(漢字音をローマ字で表記する所謂“ピンイン”)の効用を説明するための小文です。

佐藤久美：専論ではないとはいっても、契丹文字研究小組(1977)の手法に“直接に”つながる研究方法を提示したという点で、その意義は小さなものではないですね。厲鼎{火奎}(1958)の41頁を引用すると次のようにあります。

■我們揚州方言里，“欣”、“興”二字，不能分別，都讀 xin。因此在考釋契丹文這兩個字的對譯時，便模模糊糊的過去了。从《語文知識》1958年1月号里，看到《常用漢字拼音表》是用拉丁字母拼注普通話標準音的，我覺得極其有用，是我們學習普通話的老師。我从這表中63頁左欄里，学会“欣”是 xin，“興”是 xing，兩個字的音不同。因之我才辨識出：過去所已考出的契丹文“興”作“𐰺𐰽𐰾”，“欣”作“𐰺𐰽𐰿”，顯然，兩個字下半不同的部分，正是“-ng”和“-n”的分別。因此決定：“𐰾”=ng，“𐰿”=n；同時“𐰺”=x，“𐰽”=i。契丹文“興”“欣”二字在這里，是借用漢字，加以音譯。

這個發現，連類解決了許多契丹字的考釋。 (41頁)

山村健一：厲氏は、まず興(拼音表記は xing)の“漢字音”に対応する契丹小字を𐰺𐰽𐰾とし、欣(拼音表記は xin)の“漢字音”に対応する契丹小字を𐰺𐰽𐰿とします。これにより、𐰾=ng、𐰿=n、𐰺=x、𐰽=i(ローマ字はピンイン表記。音声表記ではない)というように契丹小字の音を決定します。

佐藤久美：興と𐰺𐰽𐰾、欣と𐰺𐰽𐰿という対応が何に拠るものか書いてありません。両者を漢字音とすることに間違いはないのでしょうか。

### 興=𐰺𐰽𐰾と欣=𐰺𐰽𐰿

安井教授：興=𐰺𐰽𐰾、欣=𐰺𐰽𐰿という対応は、おそらく、山路廣明(1943)と同様に、羅福成氏の研究に拠ったのでしょう。

興=𐰺𐰽𐰾については、金毓黻(1934; 1974)『遼陵石刻集録』に採録された「興宗皇帝哀册文羅福成釋文」にあります。𐰺𐰽𐰾-𐰺𐰽に、皇帝名の“興宗”が傍訳

として付されています。なお後で述べることですが、厲鼎{火奎}(1958)は、契丹小字の𐰺と𐰾を区別しません。この例では𐰺が正しく𐰾は誤りです。

興宗皇帝哀冊文 2 行目

𐰺𐰾𐰽-𐰺𐰾-𐰾𐰽-𐰽𐰾-𐰽𐰾-𐰾𐰽-𐰽𐰾-𐰽𐰾-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽  
興 宗 神 聖 大 孝 章 天 重 熙 皇 帝

他方の欣=𐰺𐰾𐰽は、『遼陵石刻集録』に採録された「大金皇弟都統經略郎君行記石刻」にあります。この「郎君行記」は、契丹小字文とその漢訳が同じ碑面に刻されています。羅福成氏は契丹小字文の𐰺𐰾𐰽に、傍訳として漢訳の「欣懌」を付します。

大金皇弟都統經略郎君行記

契丹文 4-5 行

・ ・ ・ 𐰽𐰾𐰽-𐰺𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰽𐰾-𐰽𐰾-𐰾𐰽-𐰽𐰾-𐰽𐰾-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽  
不勝 欣懌 體 陽 太守 與 酣 飲 而歸  
-𐰽𐰾-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽-𐰾𐰽 【本文終了】  
時 天 會 十 二 甲 寅 年 仲 冬 十 四 日 記

漢訳 8-9 行

・ ・ ・ 不勝欣懌與體陽太守酣飲而歸時天會十二年歲次甲寅仲冬十有四日【本文終了】

【欣懌に勝えず（非常に喜んで）、體陽太守と共に心ゆくまで酒を飲んで歸った。時に天會十二年甲寅仲冬十四日】

佐藤久美：郎君行記の契丹小字文の傍訳は、漢訳の“紀年”とその“直前の一文”を、ほぼそのまま対応させたようにみえます。“当て推量”のようにみえるのですがいかがでしょうか。

山村健一：興宗皇帝哀冊文で、皇帝名の「興宗」が漢字音として表記されるのは理解できます。しかし、郎君行記の“欣懌”のほうは、たしかに佐藤さんが言うように“当て推量”の観があります。そもそも“欣懌”の意味に相当する“欣”は一般的な語です。このような語を漢語で表記するものでしょうか。

安井教授：郎君行記の契丹小字文𐰺𐰾𐰽について、『契丹小字研究』(1985)をみると未解読の

ままです。**𠂔𠂔𠂔**と欣は対応しないとの判断のようです。その後の即實(1996)<sup>10</sup>や清格爾泰(2002)<sup>11</sup>でも未解読のまま残されています。後代の研究者は、**𠂔𠂔𠂔**を欣の漢字音とは見ていません。

山村健一：**𠂔**は除くとして、厲鼎{火奎}(1958)が解明した音**𠂔**=ng、**𠂔**=x、**𠂔**=iは、『契丹小字研究』(1985)で**𠂔**=[iŋ]、**𠂔**=[x/kʰ]、**𠂔**=[i]なので、ほぼ的を射ています。もっとも厲鼎{火奎}(1958)は、興=**𠂔𠂔𠂔**に漢語拼音方案のローマ字xingをあてるわけですが、漢語拼音方案のxは音声表記としては舌面摩擦音の[e]です。遼代では喉の摩擦音[x]であったはずですから、漢語拼音方案のxをそのまま契丹小字の音価として用いることはできない、ということ言うまでもないですね。

なお、なお議論からやや離れますが、羅福成氏の「大金皇弟都統經略郎君行記石刻」の傍訳には「醴陽太守興」とあります。これは漢訳に「與醴陽太守」（醴陽太守と）とあるところ、「興」（～と）を名詞に後置させ、アルタイ諸語の語順としたものです。羅福成氏が契丹語をどのように見ていたかを示すもので興味深いですね。

## 芋づる方式

佐藤久美：厲鼎{火奎}(1958)は、「興と欣が契丹小字で表記された漢字音であるという発見を利用するならば、芋づる式に様々な契丹文字解読上の問題を解決することができる」<sup>12</sup>と述べており、これは解読にとって重要ですね。

山村健一：契丹小字研究の方法を述べたもので、未解読文字の“解読の鍵”を明文化したとも言うことができます。その意味で、僕は期を画する一言だとおもいます。

## **𠂔**=iの展開

佐藤久美：次いで厲氏は、求め得た**𠂔**=iという音を利用して、意味だけが与えられていた契丹文字を“漢字音”として読みます。

■就“**𠂔**”=i講：契丹文“懿”字作“**𠂔𠂔**”，顯然是兩個“i”，也是借用漢字，加以音譯。我們知道滿洲文里，借用漢字的占三分之一；女真文字根拠《女真譯語》，借用漢字加以

<sup>10</sup> 即實(1996)『謎林問徑 — 契丹小字解讀新程』瀋陽市：遼寧民族出版社。267頁参照。

<sup>11</sup> 清格爾泰(2002)『契丹小字釋讀問題』東京：国立亞非語言文化研究所。8頁参照。

<sup>12</sup> 「契丹文“興”“欣”二字在這里，是借用漢字，加以音譯。這個發現，連類解決了許多契丹字的考釋」。

音譯的也不少。現在契丹文里也有這樣多是不是怪的。

(41 頁)

山村健一：契丹小字文の中に、漢語音を、次々に見つけていくわけですね。『遼陵石刻集録』(1934)の「道宗宣懿皇后哀册文 陳思摹寫 羅福成釋文」では、契丹小字文に、皇后の名が漢語傍訳として付されています。このうち𐰽𐰽に、𐰽=i を当てるならば ii となり、懿を“漢語音”として読むことができるというわけです。

#### 宣懿皇后哀册文 1 行目

𐰽 𐰽 𐰽-𐰽𐰽-𐰽𐰽-𐰽𐰽

宣 懿 皇 后

佐藤久美：「満洲文や女真文の中に借用漢語が多く用いられていることからみて契丹文のなかに多くの借用漢語があっても怪しむに足りない」とする発言も重要ですね。契丹文の中に漢語が多いとする見方は、先に検討した山路廣明(1943)も同様です。

#### 𐰽=ng の展開

山村健一：厲氏は、契丹小字 𐰽 の字形の由来を、漢字の「几」に求めます。𐰽 の音も、漢字「几」により ji とします。そこで、先の 𐰽=ng という音を利用して、𐰽𐰽 を漢字音で jing と読み、皇帝名の景宗の景の漢字音とします。

■就“𐰽”=ng 講：和“興宗”作“𐰽𐰽𐰽-𐰽𐰽”一樣，契丹文里有个“𐰽𐰽-𐰽𐰽”。“𐰽𐰽”字右旁是 ng，左旁是形近漢文“几”字的“𐰽”讀音和漢文“几”字相同，便是 ji(上声)，所以“𐰽𐰽”=jing(上声)，那当然是《遼史》里“景宗”的“景”了。(42 頁)

安井教授：漢字「几」は、藤堂明保(1978)<sup>13</sup>によると元代音で ki、現代北京語音で ji ([tei]) です。厲氏はこの漢字と音によって契丹小字 𐰽 が作られたと見るわけですね。

佐藤久美：𐰽𐰽-𐰽𐰽 (実際は𐰽𐰽) は道宗哀册の 13 行目に出てきます。「道宗皇帝哀册文 陳思副寫 羅福成釋文」を見ると、𐰽𐰽に「宗」という傍訳を当てるけれども、その前後に傍訳はなく空白のままです。羅福成が読めたのは「𐰽𐰽宗」だけであったということですね。厲氏は、傍訳がない 𐰽𐰽 を漢字音として jing と読み、皇帝名の景を当てたというわけです。

<sup>13</sup> 藤堂明保編(1978)『学研漢和大字典』学習研究社。

道宗皇帝哀册文 13 行

凡用-全𡗗-丹文𡗗丹文𡗗 . . .

宗

山村健一：なお、厲氏は**凡用-全𡗗**の最後の文字を**𡗗**とするのですが、実際の字形は**𡗗**であり**𡗗**とは異なっています。この点については次の段で言及します。なお、先ほど安井先生からもありましたが、「凡」の声母を表わす漢語拼音方案の *ji* の *j* は舌面破擦音の [tɕ] であり、これは遼代では喉の破裂音 [k] であつたはずです。漢語拼音方案の *j* をそのまま契丹小字の音価として用いることはできないことは言うまでもないことでしょう。

#### **𡗗 = n の誤まった展開**

山村健一：厲氏は先に、**凡用-全𡗗**の**凡用**を漢語音「景」としました。次いで、求め得た**𡗗 = n**を**全𡗗**にあてはめ、**全(?) + 𡗗(n)**とし、これも漢語音の宗 *zon* とします。これで、**凡用-全𡗗**は漢語音の景宗となります。なお、宗 *zon* という音は現代北京語の *zong* と合わないのですが、現代の揚州方言で宗は *zon* であり *zong* ではないということ根拠にして、五代北宋時期の北方漢語音は *zon* のようであつたと、議論を展開します。

道宗皇帝哀册文 13 行

凡用-全𡗗-丹文𡗗丹文𡗗 . . .

景 宗

*jing zon*

■就“**𡗗**” = *n* 講：“宗”字契丹文作“**全𡗗**”。右旁是“*n*”已无疑義。左旁是 *z*, 可以推知。所以“**全**” = *z*, 便也可決定。

当然這裏便附帶發現一個問題：“宗”字現代漢語普通話讀 *zong*, 揚州一帶方言讀 *zon*。現在契丹文里借用漢字, 也作 *zon* 音, 不作 *zong* 音, 可見是過渡時期-*n* 収声于舌尖鼻音的字, 逐漸衍變分化成-*ng* 収声于舌根鼻音的字, 但還不洩普遍。所以契丹文里的“宗”, 便是還在我們北方話未變 *zon* 為 *zong* 的五代北宋時期, 被契丹人学了去的。 (42 頁)

佐藤久美：厲氏は最初に**𡗗 = n**としたわけですが、この想定が仮に正しかったならば、**全𡗗**



の**坐**は-n 韻尾となり、**坐**を宗の漢字音とする厲氏の議論は理屈に沿っています。しかし現在に目から見るならば、宗に対応する契丹小字は**坐**ではなく**坐**なので、厲氏の議論は成り立ちません。厲氏はどうして**坐**と**坐**を混同したのでしょうか。

山村健一：おそらく厲氏は、**坐**を**坐**の草書体と見做し、**坐**=**坐**と考えていたのではないのでしょうか。**坐**の最後の一筆は、下の字へ続く意味のないもの、と考えていたのでしょうか。

安井教授：いずれにしても、宗を**坐**とするのは誤りで、**坐**が正しいのですが、その後の研究の目から見るならば、**坐**（厲氏は**坐**とする）を宗の“漢字音”とした判断は正しかったこととなります。現在では**坐**は s/ts、**坐**は uŋ であり、suŋ もしくは tsuŋ とされます。

山村健一：五代北宋時期の北方漢語音において、宗などの音は [-un] であり、その後[-uŋ] となり、現代北京語に至ったとする厲氏のユニークな想定は成立しませんね。

安井教授：成立しません。しかし、契丹人によって話されていた当時の漢語の音形や、契丹人によって保たれていた古い音形を持つ“契丹漢字音”<sup>14</sup>は、契丹語の影響で訛りを持っていたはずです。それがどのようなものであったか、慎重に検討する必要があります。五代北宋時期の北方漢語音を zon [tsun] とすること自体は成り立たないのかもしれませんが、一概に笑い飛ばすこともできません。

## おわりに

安井教授：契丹文字研究小組(1977)で公表され、清格爾泰・劉鳳翥等(1985)に結実した期を画する研究の前段階に、画期的な研究を引き出す準備として、解説の“起点”と呼ぶことができる研究があり、それを二つ確認しました。

佐藤久美：一つは日本の山路廣明(1943)でした。契丹文のなかに漢語が多いと見做し、その漢語と契丹文字との対応により、契丹文字の音を求めるという方法は、契丹小字を解説する起点といっても良いということでしたね。

山村健一：いま一つは厲鼎{火奎}(1958)の研究です。契丹小字で表記された漢語音によって幾つかの小字の音価を定め、次いでその音価を手がかりとして、次々と芋づる式に他の小字の音価を定めていくという手法は、契丹文字研究小組(1977)の手法に直接つながるものです。

安井教授：二人の研究者は、ともに金毓黻(1934)『遼陵石刻集録』に採録された羅福成氏の研究の恩恵をこうむっていることを見逃してはいけませんね。最初期の研究は、

---

<sup>14</sup> 吉池孝一(2011)「契丹漢字音の存否」『KOTONOHA』109 (2011年12月)、12-18頁参照。

契丹文と漢文を突き合わせて契丹文の意味を推定するというものです。当て推量のようなものも含まれますが、解読には欠かすことのできない基礎的な作業です。今日の勉強会はここまでにしましょう。